

サッカーにおけるクロスボールに対する
フォワードの動きについての研究
酒井 悟 (競技スポーツ学科 スポーツ情報戦略コース)
指導教員 望月 聡

キーワード：クロス, ニアサイド, ファーサイド, 斜めの動き

1. 緒言

近年のサッカーでは、守備が組織化されており個人のみで得点することが困難になってきている。そこで有効的な攻撃はサイド攻撃である。中央よりもスペースが多いサイドからゴール前にクロスをあげてゴールを奪うことが有効的だと考える。しかし注目されるのはサイドの選手で、クロスや角度などがあげられるが、FWの動きも重要なことであると私は考える。FWの動きによってクロスやあげられる位置なども変わり、相手のマークの動きも変わってくる。そこでどのような動きが有効であるのか、またどのような動きのパターンがあるのかに疑問を抱き本研究に取り組み、本学サッカー部にフィードバックすることを目的とする。

2. 研究方法

関西学生リーグ1部のB大学サッカー部の試合、前期11試合を研究対象とし、ゴールまたはシュートまで導いたクロスからのFWの動きのビデオ分析を行う。

クロスや位置をエリアに分け、クロスからシュートまでをエリアごとにどのような動きが多いのかデータを集計する。次に選手の特徴やそれぞれのエリアに適しているFWの動き方を分析する。

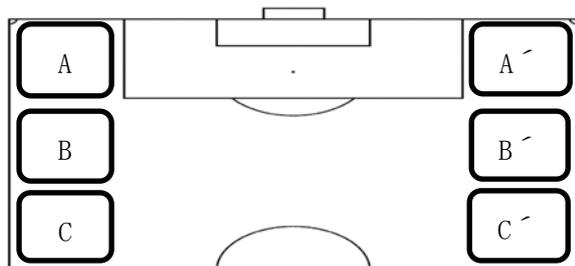


図1 クロスのエリア分け

3. 結果と考察

A, A'からのクロスの場合、エリア別で一番多くのクロスがあげられており、ファーサイドからニアサイドへの動きが多く、クロスからの全得点2点のうち1点がこの動きであったため有効であるといえる。

B, B'からのクロスの場合、9本のクロスのうち約半数がファーサイドからニアサイドへの動きであった。A, A'に比べて動く距離も長くなり、足の速い選手が斜めの動きを多くしていた。

C, C'からのクロスの場合、いろいろな動きがあり、動きにパターンは見いだせなかった。しかし、B, B'のエリアより動く距離が長くなり足の速い選手がより多く斜めの動きをして、得点にもつながっているため、足の速い選手の斜めの動きは有効であるといえる。

4. まとめ

どのエリアもファーサイドからニアサイドへの動きが多く、ディフェンスの背後からディフェンスの前に出てシュートすることが有効だといえる。逆にニアサイドからファーサイドへの動きは少なく、有効とは言えない。また、クロスや上げる位置がゴールから遠ければ遠くなるほど、足の速い選手の斜めの動きが多くなり有効であるといえる。

引用・参考文献

林雅人 サッカーオフ・ザ・ボールの動き・戦術・トレーニング
(2012年 株式会社ナツメ社)